

大変におどろき、おやくしさまが、仁王さまを二人の若者にして、おつかわしくくださったにちがいないと、大変に感謝しました。

その後、彦次郎夫婦は病気もなおり、大変元氣になり、仕事もできるようになり、田の草を取りに、仁王さまが田植えをしてくれたところに行くと、あれほど、吸いつ

かれて苦しめられた蛭（池・沼・水田などにすみ、身体が平たく細長い、そして、吸ばんを持ち、人や動物の血をすう下等動物。）が、うそのようにいなくなっていたそうです。また、その近くの蛭は、口がわれ、人に吸いつかなくなっていたそうです。

その後、そのあたりの土地を彦次郎、その田を仁王田と、よぶようになり、彦次郎にまけずおとらず、村人もおやくしさまをあつく信こうするようになりました。

また、おやくしさまの近くには、彦次郎の田植えを手伝った時に、ケサがぬれてし

